ワークショップ・デザイン　第２回

「安心安全な場づくりと相互理解」

研修講師・ファシリテーター　後藤　拓也

本稿では，ワークショップ・デザインにおける安心安全な場づくり，また参加者同士の相互理解を通じた関係の質の向上について取り上げていきます。まずは，「ワークショップ」という場の意味を紐解きながら，安心安全な場や相互理解の重要性を理解し，後半ではそのための具体的なワークなどにも言及します。

ワークショップにおける主体性と協働の重要性

「ワークショップ」とは何かと問うとき，様々な形での定義づけが可能ですが，基本的には「その場に主体的に参加するメンバーが，協働しながら，創造や学習を生み出す場」を意味するものと説明できます。その要素である「主体性」，「協働」，「創造と学習」について簡単に説明します。

① 主体性

「主体」を辞書で引くと，「自覚や意志に基づいて行動するもの」や「物事を構成する上で中心となっているもの」とあります。この意味からすると，ワークショップの参加者は，理想的には，自分の意志でその場に参加し，受動的な存在ではなく，ワークショップにおける中心的な存在としてその場にいることとなります。「ファシリテーターはお産婆さん，参加者は生まれてくる子ども」と例えられることがありますが，まさにワークショップでは参加者が主役，その参加者の創造や学習をサポートするのがファシリテーターだと言えます。生徒に主体性がなく，常に受け身でいる状態では良いワークショップの実現は難しくなります。学校現場では，「授業だから参加する」という前提ももちろんありますが，いかに生徒が本来持つ主体性が発揮される場を整えるかが重要となります。

② 協働

ワークショップは多くの場合，一人ではなく複数の人が集い実施されます。その際，同じような目標や想いを持っている人がたくさん集まっているのに，個人で考え，作業するだけでは折角人が集まる意味があまりなくなってしまいます。個々人が持つ経験や知識，想いや創造性などが交わることで，創発が生まれ，個人だけの創造・学習では生まれないものが現れたりします。言い換えれば，ワークショップの場がより豊かなものとなるのです。よって，主体性を持った参加者間の協働もまた，ワークショップをデザインする際に押さえたいポイントとなります。

③ 創造と学習

ワークショップでは，様々な創造や学習が生まれます。それらは，形のある作品や商品かもしれませんし，形のないサービスやアイデアかもしれません。また，組織としてのビジョンや一体感，気づきが生まれる場になるかもしれません。いずれにせよ，ワークショップを通じてこうした豊かな創造や学習という果実を収穫したいと思う場合には，参加者が主体性を発揮し，協働しやすい土壌をしっかりと育むことが重要になってきます。

主体性や協働を妨げるブレーキをはずす

ワークショップにおいて重要な主体性と協働について，アクセルとブレーキを比喩に使いながら考えて見たいと思います。まずアクセルとは，「学びたい」「知りたい」「やりたい」という欲求であり，主体性の原動力です。一方で，ブレーキとは，そうした前に進む原動力を抑える力です。

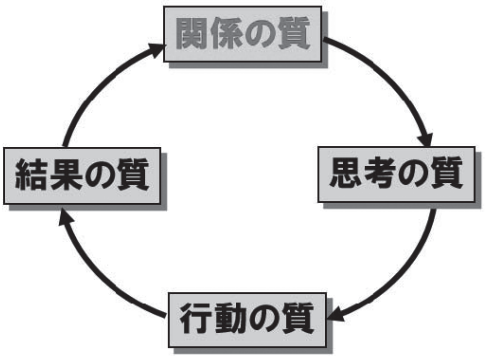
小さな子どもに「なぜ○○なの？」「○○って何？」と聞かれた経験はないでしょうか？こうした好奇心は本来誰もが有しているもので，人は何かを学びたい，何かを知りたい，何かをやりたいと考える存在だとみることができます。またそれは協働においても同様です。ヒトは社会的動物であると言われますが，私たちは生まれた時から常に他者とかかわり合いながら日々を生きています。そうした誰かと関わりたい，他者への興味や関心というものもまた，協働のアクセルとして大なり小なり人に備わっているものだと考えられます。

車を早く走らせたいと思ったとき，私たちがまず行うことは，アクセルを踏み込むことです。例えば，生徒が夢中になれるようなワークをつくるなど授業に工夫を凝らすことで，生徒がより主体的に学ぶ環境づくりを進めることです。

しかし，主体性や協働というアクセルが人にそもそも備わっているものだとすれば，私たちには異なる打ち手が見えてきます。それは，アクセルの力を抑制するブレーキを和らげること，取り除くことです。そのために，私たちは「関係の質」にアプローチすることが重要となります。学校では主に「生徒同士の関係性」や「先生と生徒の関係性」を意味することになると思います。

関係の質を上げる

関係の質については，マサチューセッツ工科大学のダニエル・キム教授が提唱する「成功の循環モデル」を知ることで理解が深まります。このモデルは，関係の質が高まれば，思考の質が高まり，そうすると行動の質が高まり，結果の質が高まっていく，また結果の質が高まることで関係の質がさらに高まっていく，ということを意味します。しかし，これは好循環にもなれば，悪循環という形で強化されていくこともあります。



マサチューセッツ工科大学　ダニエル・キム教授「成功の循環モデル」

例えば，チームや組織のメンバー間が互いをよく理解し，尊重していたり，困った時には互いにサポートできる関係があると（関係の質），活発に意見を言い合ったり，創造的なアイデアが生まれやすくなります（思考の質）。そうすると，自発的，積極的な行動が生まれ（行動の質），より良い成果が得られます（結果の質）。そうした良い成果はさらにチームメンバーの関係をよくすることに寄与します（関係の質）。結果や行動の質を直接的に高めるのは難しいことですが，関係の質に働きかけることで，最終的には望む結果を手にすることができるようになります。

ワークショップでも同じことが言えます。そもそもの土壌である関係の質を耕すことで，ブレーキが弱まり，参加者の主体性や協働が促されます。結果として，ワークショップで生まれる様々な創

造や学習は，より実り豊かなものになるのです。本稿では，関係の質を上げるための具体的な方法として，「安心安全な場を整える」，「他者を受け止め，理解する機会をつくる」という二つを取り上げます。

安心安全な場を整える

参加者の方が持つ不安や恐れを軽減しながら，安心安全な場を整えることがワークショップでは重要です。例えば，「間違ったことを言ったら先生に叱られる，周りの生徒に馬鹿にされる」と感じている状態では，積極的に発言することは難しくなります。また，主体性のブレーキは，現実として実際に存在している以上に，生徒の思い込みの中に存在していることが多くあります。「授業は先生が言うことを聞いていればいい」「間違えることは恥ずかしい」「失敗はよくないこと」など，多くの事柄は学校の中だけではなく，広く社会で共有されている思考の枠組みだと思います。

社会的な思考の枠組みは，実は先生自身にも多く共有されています。そうした意味で，安心安全な場をつくるヒントは先生自身の中にもたくさんあるはずです。自分自身の体験や，自分の中にある不安や恐れにも意識的になり，生徒の身になって考えてワークショップを行っていくことで，生徒もより安心安全な場を感じられるようになるのではないかと思います。

以下，参考程度ですが，安心安全な場をつくるいくつかの方法をご紹介します。

◎ 基本ルールを設定する

ワークショップの中で，全員で守る基本的なルール，皆の約束事を設定します。ワークショップを進める上で大切にすることと言ってもいいでしょう。ワークショップの対象や目的によって多様なルールが考えられますが，代表的には以下のようなものがあります。

・相手を批判せず，尊重する
・人の話をよく聴く
・本音を話す
・意見やアイデアを積極的に出す
・失敗を歓迎する
・秘密を守る（ワークショップで知った話を外の人に話さない）

ルールは模造紙などに書き出し，冒頭に説明・同意を得た上で，全員が見える位置に貼っておくと効果的です。あまり守られてないなと思ったら，皆でもう一度模造紙を見て思い出させることもできますし，守っていない生徒には注意がしやすくなります。

また，ルールの項目は先生が提案することもできますし，生徒と一緒にルールをつくることも効果的です。皆で話し合ったルールなら，より納得感を持った形で，皆で守っていこうという気持ちになるでしょう。

◎ 挑戦や失敗についての認識を変える

挑戦の重要性や，失敗から学ぶ大切さを話すことや，生徒に実感してもらえるゲームなどを実施することもいいでしょう。また，失敗を歓迎する，失敗した人を褒めるなどのルールや習慣づけを皆で決めてやってみることもいいかもしれません。

また，ワークショップをやる中で先生自らが失敗することもあるでしょう。その失敗自体を題材に，先生であっても失敗をすることを知ってもらうこともできます。どんな言葉よりも先生自身の在り方が生徒には一番伝わっていくのではないかと思います。

◎ 発言しやすい環境をつくる

回答に難しい問いを投げて，すぐに全員の前で答えてもらうことは生徒にとっては容易ではないと思います。そうした場合には，回答や発言をしやすいステップをつくることも大切です。例えば，問いを出した後に，個人で考える時間をつくり，まずは各自ノートやポストイットに書き出してもらう。その後，2人ペアで話をしてもらい，最後に全体で話を共有するなど，様々な工夫が可能だと思います。

また，問い自体を変えることも有効です。例えば，「あなたは卒業後，どんな仕事に就きたいですか？」という質問が難しい場合には，「あなたは，どんなことをしている時が一番楽しいですか？」という問いから始めることも可能です。また特にワークショップの冒頭においては，自分の経験について話をしてもらうなど，正解や不正解がない問いかけが効果的なことも多くあります。

他者を受け止め，理解する機会をつくる

誰でも初対面の人には緊張したり，いきなり本音で会話したり，深いコミュニケーションをとることは難しいと思います。逆に気心が知れた仲間内では，悩みも話せたり，厳しいことも言い合えたりすると思います。その意味で，お互いをよく知ることも，主体性のブレーキを和らげることに貢献します。

以下に，相手を理解することに役立つワークの一例を紹介します。

◎ チェックイン

できれば全員の顔が見えるように椅子のみで輪をつくり，一人ずつ順番に話をしていきます。質問内容は様々なものが考えられますが，今の気持ち，自己紹介，最近あったニュースなど，できるだけ正解・不正解がなく，自己開示をしやすいものを選ぶと良いでしょう。全員でやると時間がかかりすぎる場合や，恥ずかしいと感じる人が多い場合には，少人数のグループで実施することも可能です。

◎ ○○な人バスケット

フルーツバスケットを，フルーツの名前ではない形で実施します。椅子を人数分より一つ少なく用意し，円形に配置します。オニの一人は円の真ん中に立ち，「出身地が○○な人」「○○の食べ物が好きな人」など何かを問いかけます。該当する人は席を立ち，別な椅子に移動しなくてはいけません。その間にオニは空いた椅子に座るように試みます。その後，新しいオニがまた新しい質問をします。ゲームの中で様々な質問をすることで，相手を知っていけるワークとして活用ができます。また，いきなり質問を考えることが難しそうであれば，事前に質問を皆で考える時間を持っても良いでしょう。

◎ ストーリーテリング（物語を語り合う）

何人かのグループで，一人が物語の語り手，他の人が聴き手となり，順番に互いの人生の物語を語り合い，聞き合うワークです。「あなたの子ども時代から今に至る人生を語ってください」，「最近あった一番嬉しい出来事について語ってください」などテーマは自由に変更可能です。おすすめのやり方は，聴き手は質問や突っ込みなしで，ただ相手の話を集中して受け止めるという形です。また，簡単な紙芝居をつくり紙芝居形式で行ったり，子どもの頃の写真などを持参してもらい見せながら行ったりすると盛り上がります。

「21 世紀型の学び」体験プログラム事務局
※ 先生向けワークショップの情報が得られます
https://mj23masa10.sakura.ne.jp/active2016/